

令和元年度 岐阜県立多治見高等学校 第1回 いじめ防止対策委員会 議事録

日時：令和元年5月21日（火）

場所：多治見高等学校 校長室

出席者	学校関係者	校長	教頭	生徒指導部長	各学年主任	教育相談担当
	第三者委員	臨床心理士		川原 聡 様		
		保護者代表		小木曾照代 様		
		地域代表		村瀬 功一 様		

1. 開会あいさつ

鈴木 彰 校長

いじめはあってはならないものである。本校生徒もあってはならないものだという認識であると思う。しかし、自分たちが今やっていることはいじめだとは思っていない現状もある。とてもいい子が多い学校であるが、本人が気づいていない、他の子から見ればいじめであるような行動をしていることもあると思う。

今回、保護者代表、地域代表、専門家の方の意見をお聞きし、生徒が安心して過ごせるような学校づくりに生かしていきたい。

2. 自己紹介

3. 学校説明（生徒指導部長）

- ・全校生徒数620名

→クラス数の減少。3年生に最後の自然科学コースあり。来年度、全ての学年が単位制になる。

- ・生徒の様子

3年生：昨年度人間関係での問題があった。現在そういった面でのトラブルはなく、落ち着いて生活している。

2年生：昨年度いじめの訴えがあった。現在は落ち着いている。

1年生：まだ人間関係ができあがっていない。生活の様子を見ると、まだ周りに上手く馴染めない生徒が数人いる様子。周囲の生徒に声掛けをしていきたい。

- ・昨年度のいじめ防止に関する取り組み

→いじめの事案が年々増えている。昨年8件。アンケートから7件本人1件。

→解決をしている状況。

4. いじめ防止基本方針

- 平成29年度中に県からの見直し指示があり、昨年度、加筆修正により作成した。今年度、大きな変更点はない。以下、基本方針加筆修正点。

1 いじめの問題に対する基本的な考え方

(3) 3項目→「けんかやふざけあいであっても～」に修正。

5項目→「～取り組みの実施状況を学校評価の評価項目に位置付ける」を追加。

2 いじめ未然防止のための取り組み

(2) ⑤特別活動部の取り組みに「自己有用感や自己肯定感を高める」を明記。

(3) 年間計画→学校いじめ防止プログラムと明記。昨年度の計画より微調整。

3 いじめ問題に対する措置

(1) ①組織対応→いじめに係る情報を知りえた教職員は速やかに管理職に報告、情報の共有を図り、組織対応につなげなければいけない。を明記。

(2) ①重大事態の判断

→相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている。生徒や保護者から、いじめにより重大な被害が生じたという申し立てがあった場合を明記。

(3) いじめ解消の定義を明記。

4 情報等の取扱い

(1) 一次資料、二次資料及び調査報告書を5年間保存することを明記。

- 最近では何気ない言葉に敏感に反応してしまう生徒が多い。何気ない言葉かけからいじめ問題に発展していく可能性があるとして生徒に発信している。
- 危機感を持ちながら教育相談メモ等を有効活用し、早期発見、早期対応、また組織対応を基本姿勢として学校で取り組んでいる。
- 職員、生徒への教育相談研修、講話を継続的に行っていきたい。
- 問題の大きさによって生徒指導委員会からいじめ防止対策委員会へとつなげていく。また、場合によっては本校担当のカウンセラーが委員会に入れない可能性もある。
- 保護者に対して相談窓口等の紹介を行っている。

5.6. 質疑応答指導・助言

■川原 聡 臨床心理士

- 本人がどう捉えたかは主観に基づくものだから一番難しい問題である。岐阜県の方針として、いじめ事案の見落としや隠ぺいをなくすのはよいと思うが、すべて拾うのもなかなか難しい。
- 生徒には認知を変える働きかけをする必要がある。問題は本人が間違った認知を真剣に思い込んでいる点である。そこを修正してあげる必要がある。最近の子は学校生活の中で人との関係が濃すぎる傾向にある。「この子と喧嘩したらもう終わりだ。学校に来られない。」と考えてしまう。
- SNSで広くいろいろな人と関係しているのに、実際は近くて狭い世界で生きている。関係を薄めないといけない。
- 最近子どもと関わる大人が少ない。親だけでなく地域、学校を含めて最低10数人の大人が子どもと関わる必要がある。特に思春期において親子だけで話をつける、完結させるのは無理だと思う。

- ・親子関係でも、友人関係でも狭すぎて煮詰まってしまう。今ではLINEがあり、家でもゆっくりできない。距離が近すぎて、いつも見られている気がする。気にしすぎてしまう。
- ・そのため関係を薄めて広めていくことが重要であり、地域が関わっていくべきだと思う。学校だけでどうにかするのは無理だと思う。社会的に見方を変えていかなければいけない。
- ・この学校の生徒には「事を荒立てるくらいなら黙っておこう。」と思う子が多い。「解決してほしいくない。」「何もして欲しくない。」「大騒ぎになるから黙っておこう。」というあきらめの気持ちがあるように思う。
- ・しかし、全て言い分を聞いてもらえるという妄想が出てきてしまうため、思っていることを全部言えばいいというものでもない。行き過ぎや極端に偏るのはよくない。全部拾うのは無理である。そのバランスが難しい。

■保護者代表

- ・子どもからはいじめ問題の話はきいたことがない。資料を見て何件かあることを初めて知った。→いじめ認知の基準に県によってばらつきがあったため、指導によりどんな細かなこともいじめ事案の認知として報告している。いじめ事案ゼロの場合、ホームページに掲載義務もある。
- ・アンケートでいじめられていると答えた生徒は、教員から見て様子がおかしいかったり、何かに気づいたりするのか？
→こちらから見てわかるものはあまりない。アンケートに書いてきたら、もちろん話を聞く。男子同士のふざけについては他人によってどう思うかは個人さがあるので、なかなか難しい。無記名のアンケートが一番大事になってくる。見るからに落ち込んでいる生徒には声掛けをしたりして、アンテナは常に張っているようにしている。最近、不登校傾向に陥る生徒が多いので早期対応を心がけている。早めに家庭にアプローチし、SCや専門機関につなげ対応をしている。

■地域代表

- ・小学生の子どもから、学校でいじめがあると聞いたことがある。はっきりあると言っていた。子どもが授業参観に行ってもあまり発言しないので、おかしいと思い聞いたところ、「目立つといじめられる。」と言っていた。そのことを教員にきいてもあまり重大にはとらえていないようだった。どの学校でも少しはあるのかなとは思っていた。
→表立って暴力を振るうなどの事案はないと思っている。しかし何気ない言葉でのトラブル、人間関係のトラブルが多い。

7. 閉会あいさつ

鈴木 彰 校長

いじめ防止基本方針にのっとって運営していきたいと思う。今後大きな事案がないようにしていきたい。人と人の中には問題が必ずあると思うが、起きた場合に早期解決にむけて取り組んでいきたい。何も無いことを望むが細かなトラブル等は起きてしまうので、見落とさないようにアンテナを張っていきたい。お子さんからの情報が会ったらぜひ学校に伝えてもらえるとありがたい。